

鄧豁渠『南詢録』訳注(七)

宋明思想研究会 安部 力

＊はじめに

本稿は、『鄧豁渠『南詢録』訳注(六)』(活水論集・第五六・二〇一三)の継続である。今回は八八条と一〇〇条の訳注である。前回同様、訳注は各条担当者の原稿を参加者全員で検討し、それを参考にして担当者が作成した。なお本研討会は荒木見悟氏の訳注草稿を適宜参考にしながら作業を進めた。参加者は以下の通りである。

安部力(北九州高専)、荒木龍太郎(活水女子大学)、伊香賀隆(佐賀大学非常勤博士研究員)、牛尾弘孝(大分大学名誉教授)、鶴成久章(福岡教育大学)、檜崎洋一郎(北九州市立大学非常勤講師)、藤井良雄(福岡教育大学)、野口善敬(花園大学)、森宏之(花園大学国際禅学研究所客員研究員)(五十音順)

《凡例》

- 底本は国立公文書館蔵『南詢録』(「叙南詢録」万曆十五年・李宏甫、「南詢録自叙」嘉靖四四年、「刻南詢録跋語」万曆二七年・何継高)を使用した。
- 「叙南詢録」「南詢録自叙」の二つの序文、「刻南詢録跋語」以外の本文各条に付した数字は、通し番号である。
- 原文は原則として当用漢字、常用漢字、新字を用い、書き下し文は現代かな使いとした。
- 訓読文においては引用文は「」で括り、簡単な説明や補足は()で補った。
- 現代語訳は直訳を心がけたが、必要と思われる箇所には「」で適宜補った。
- 注に引用した書籍については、その初出の箇所に版本などを明記した。また大正大藏經・大日本統藏經(卍統藏)についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。
- 『禅学大辞典』は『禅学』、『禅語辞典』は『禅語』、『中村仏教辞典』は『中村』、『岩波仏教辞典』は『岩波仏教』、『漢語大辞典』は『漢語』、『大漢和辞典』は『大漢』、『中国語大辞典』は『中国語』、『明人伝記資料索引』は『明人』に、『明儒学案』は『明儒』、荒木見悟『中国撰述經典二・楞嚴經』(仏教經典14・筑摩書房・一九八六)は荒木見悟『中国撰述經典二・楞嚴經』に略記した。
- 各条の終わりに原稿担当者の名前を付した。

【八八】

＊ ＊ 八八条と一〇〇条 ＊ ＊

〔原文〕
潜魚水底伝心訣、棲鳥枝頭說道真。此非上下察乎。程子賛曰、活潑潑地。宜致思表天機之動盪也。或曰、無機之前、非太始乎。太始之始、非太玄乎。渠曰、太始之玄、是謂真玄。太玄之始、是謂無始。無始也者、無生之藏也。真玄也者、玄元之天也。無生之藏、是謂大定。玄元之天、是謂大還。是定也與是還也、無魚之潛也。無魚之潛、將何伝焉。無鳥之棲也。無鳥之棲、將何説焉。無可伝者、是謂本心。無可説者、是謂妙道。得本心者、謂之得訣。得妙道者、謂之帰真。此訣之外、非真訣。此真之外、非玄真。由是而究焉、可以知性命之旨矣。

〔書き下し文〕

潜魚は水底に心訣を伝え、棲鳥は枝頭に道真を説く。此れ上下察かなるに非ずや。程子賛して曰く、「活潑潑地」と。宜しく思いを天機を表すの動盪に致すべし。或ひと曰く、「機無きの前は、太始に非ずや。太始の始めは、太玄に非ずや」と。渠曰く、「太始の玄、是れを真玄と謂う。太玄の始め、是れを無始と謂う。無始なる者は、無生の藏なり。真玄なる者は、玄元の天なり。無生の藏、是れを大定と謂う。玄元の天、是れを大還と謂う。是の定なると是の還なるとは、魚の潜むこと無きなり。魚の潜むこと無きは、何を將つて伝えん。鳥の棲む無きなり。鳥の棲む無きは、何を將つて説かん。伝うべき無き者、是れを本心と謂う。説くべき無き者、是れを妙道と謂う。本心を得る者、之れを訣を得と謂う。妙道に帰する者、之れを真に帰すと謂う。此の訣の外は、真訣に非ず。此の真の外は、玄真に非ず。是れに由りて究むれば、以て性命の旨を知るべし」と。

〔現代語訳〕

〔王陽明は〕「潜んでいる魚は川底で心の枢要を伝えるし、宿り鳥は枝の先で道の真髓を説く。此れ〔が〕『中庸』に言う」「(日常卑近な)上下に察かなる」ことでなくてなんであろうか。「だから」程子が評して「活潑潑地」と言った「のだ」。このような天(与の枢)機の表れである動きに思いを巡らせるべきである。或ひとが「働きの兆候」すら無い以前は、太始ではないのか。太始の始まりは、太玄ではないのですか」と質問した。渠は「太始の玄を真玄と言う。太玄の始まりを無始と言うのである。無始とは、無生の藏である。真玄というのは、玄元の天のことである。無生の藏のことを大定と言い、玄元の天のことを大還と言うのである。この「大」定と「大」還とは、潜んでいる魚がまだ存在していない(状態の)ことである。潜んでいる魚が居ない(状態)を、どうやって伝えられるだろうか。棲んでいる鳥が居ない

「状態についても同じ」であり、棲んでいる鳥が居ない「状態」をどうやって説明できるだろうか。伝えられない者を本心と言う。説明すらできない者を妙道と言うのである。本心を得（「ることができ」）た者を「要訣を得た」と表現する。妙道に「回」帰できた者を「真に（回）帰した」と言う。此（「ここで言及した」）訣以外は、真訣ではない。此（「ここで言及した」）真以外は、玄真ではない。ここから突き詰めて考えてみれば、性命の旨について知ることができると答えた。

〔注〕

○潜魚水底伝心訣、棲鳥枝頭說道真Ⅱ『王文成公全書』卷二〇「碧霞池夜坐」に「一雨秋涼、夜に入りて新たななり。池辺の孤月、倍精神。潜魚は水底に心訣を伝う。棲鳥は枝頭に道真を説く。謂う莫れ、天機は嗜欲にあらざと。須く知るべし、万物是れ吾が身なるを。端無く礼樂、紛紛の議。誰か青天と宿塵を掃わん。（一）雨秋涼入夜新 池辺孤月倍精神 潜魚水底伝心訣 棲鳥枝頭說道真 莫謂天機非嗜欲 須知万物是吾身 無端礼樂紛紛議 誰與青天掃宿塵」（明德出版社『王陽明全集』第六卷四七二頁）とあるを踏まえる。同じような表現が『陳白沙集』卷八「次韻孫御史別後見寄」にも見える。○上下察し程子賛曰、活潑潑地Ⅱ六四條注参照。「活潑潑地」は魚がはねるように勢いがよいこと。極めて活潑なこと。この部分を踏まえた語が朱子『中庸章句』（第一二章）に「鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る。その上下に察かなるを言うなり」と見える。また「活潑潑地」は『二程全書』卷四に、「鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る。その上下に察かなるを言うなり。（中略）会得する時は活潑潑地、会得せざる時は、ただこれ精神を弄するのみ」とある。○天機Ⅱ天与の枢機。「南詢録自叙」及び一条注に詳しい。○動盪Ⅱ動盪に同じ。うごく、うごかすこと。○無機之前Ⅱ太始Ⅱ天地のはじめ。形の始。太初の次。太始。『列子』天瑞篇に「太初有り、太始有り、太初とは、気の始めなり。太始とは、形の始めなり。（有太初、有太始、太初者、氣之始也。太始者、形之始也）」とある（『列子』東洋文庫 533、二〇頁参照）。また、「古代指天地開闢、万物開始形成的時代」ともある（『漢語』二冊一四六八頁）。○太玄Ⅱ虚無恬淡の道をいう（『大漢』三卷五二六頁）。「太玄」については揚雄『太玄経』及び司馬光『揚子太玄経』を参照。○真玄Ⅱ宇宙の本体、真如。（『大漢』八卷一九九頁）。『漢語』には「①指諸天之神。②称『易经』。呂澂『中国仏学源流略講』」第九講 唐人講的玄学 容、仍不出於三玄。」とある（二冊一四二頁）が、これは『大方広華嚴経随疏演義鈔』卷第十四に「然れども此の方、儒道の玄妙は三玄を越えず。周易に真玄と為し、老子に虚玄と為し、莊子に談玄と為す（然此方、儒道玄妙不越三

玄。周易為真玄、老子為虚玄、莊子為談玄）」（T36・103c）とあるを踏まえる。○無生之藏Ⅱ「藏」は、かくす、おさめる。いだく、つつむ。たくわえる。『易经』繫辭伝下に「君子は器を身に蔵す」とある（岩波文庫本『易经』下冊、二六二頁）。○大定Ⅱ（ダイテイ）Ⅱ大いに定まる。天地自然の理法に順い、定まって常あること。『莊子』徐無鬼に「大信を知り、大定を知るは、至れり。（中略）大信は之を稽め、大定は之を持す」とある（岩波文庫『莊子』第三冊二七六頁）。（また、「ダイジョウ」では、パリ仏教で欲界の小定に対して色界無色界の有漏善の根本定を言う（『禅学』七九九頁）とある。）○玄元之天Ⅱ四〇條注を参照。ここでは「玄妙な大元の無上さ」の意か。○大還Ⅱ大いに還る。全部を挙げて帰る。「大還丹」で仙薬の名。（『大漢』三冊三九一頁）○本心Ⅱ八六條参照。○妙道Ⅱ三条、七六條を参照。たえなる道、さとの道。仏道。（『中村』一五九七頁）○得訣Ⅱ「訣」については六四條、七三條、九四條、一〇二條を参照。○帰真Ⅱ一六條注を参照。『（首）楞嚴経』に「汝等一人、真を発して元に帰すれば、此の十方の空、皆盡く消殞す（汝等一人、発真帰元、此十方空、皆盡消殞）」（T19・147c）とある。○真訣Ⅱ修行の秘訣。指導者が学人に伝授する修行の要心（『禅学』六〇八頁）。『大慧普覚禅師法語』卷第二十四に「貞観中、建鄴に帰る。牛頭山に入りて懶融禅師に謁し、大事を發明す。懶融、巖に謂いて曰く、吾れ大師の真訣を受信するも、得る所は都て亡ぶ。設い一法の涅槃を過ぐる有るも、吾れ亦た夢幻の如し、と説く。（貞観中帰建鄴。入牛頭山謁懶融禅師、發明大事。懶融謂巖曰、吾受信大師真訣、所得都亡。設有一法過於涅槃、吾説亦如夢幻）」（T47・912b）とある（荒木見悟『大慧書』禅の語録 17、二三二頁を参照）。○玄真Ⅱ①道家が称する妙道、精気などのこと。②淳樸、天然。③玉の別名。（『漢語』二冊三一三頁）。○性命之旨Ⅱ性命は「自叙」、五条、二〇條、二三條、などを参照。（安部力）

【八九】

〔原文〕

陽明詩教、却憐擾擾周公夢、未及惺惺陋巷貧、諷孔子。一竅誰將混沌開、千年様子道州来、諷周子。影響尚疑朱仲晦、支離休作鄭康成、諷朱子。

〔書き下し文〕

陽明の詩教に、「却つて憐れむ擾擾たる周公の夢、未だ惺惺たる陋巷の貧に及ばざるを」というは、孔子を諷するなり。「一竅誰か混沌をば開く、千年の様子道州より来る」というは、周子

めよ」というのは、朱子を諷するなり。

〔現代語訳〕

陽明の詩の教えに、「憐れなことよ、周公の夢云々と心乱れるのは、「顔淵のように」悟りきつて路地裏の貧困生活に甘んじるのには及ばない」というのは、孔子を風刺したのである。「混沌に竅をあけてしまったのは誰であろう、千古の模範は道州が生み出したのだ」というのは、周子を風刺したのである。「影や響き」のように実体のない経書改訂をやった朱仲晦はやはり疑わしいし、支離滅裂な「経解を作った」鄭康成のようになってはならない」というのは、朱子を風刺したのである。

〔注〕

○却憐擾擾周公夢〓〓『王文成公全書』卷二十「夜坐」に「独り秋庭に坐すれば月色新たなり、乾坤何れの処にか更に間人、高歌し度りて清風と与に去るに、幽意自から随う流水の春、千聖本より心外の訣無し、六経須らく払うべし鏡中の塵、却つて憐れむ擾擾たる周公の夢、未だ惺惺たる陋巷の貧に及ばざるを（独坐秋庭月色新、乾坤何処更間人、高歌度与清風去、幽意自随流水春、千聖本無心外訣、六経須払鏡中塵、卻憐擾擾周公夢、未だ惺惺陋巷貧）」とある。『年譜』によれば、嘉靖三年（一五二四）八月、九月頃の作であり、当時朝野を揺るがした「大礼の儀」をめぐり、王守仁が時事に感じるところがあつて自己の微意を示した二詩のうちの一つであるとする。○周公夢〓〓『論語』述而篇に「子曰く、甚しいかな、吾が衰えたるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず。（子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公）」とある。（岩波文庫本一二九頁）○陋巷貧〓〓『論語』雍也篇に「子曰く、賢なるかな、回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂いに堪えず、回や其の樂しみを改めず。賢なるかな、回や。（子曰、賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。賢哉、回也）」とある。（岩波文庫本一一二頁）○一竅誰將混沌開〓〓『王文成公全書』卷二十「汪進の太極巖に書す（書汪進之太極巖）」二首の第一首に「一竅誰か混沌をば開く、千年の様子道州より来る、須らく知るべし太極は元無極なるを、始めて信ず心は明鏡台に非ざるを（一竅誰將混沌開、千年様子道州来、須知太極元無極、始信心非明鏡台）」とある。正徳十四年（一五一九）江西巡按の任務に就いてから作った「江西詩一百二十首」の内の一首である。○一竅〓〓南海の帝の儵と北海の帝の忽が、中央の帝である渾沌に大いに飲待されたお札に、七竅（感覚器官の穴）が全く無い渾沌のために毎日一つずつ竅をあけてやったら、七日めに渾沌が死んでしまったという『莊子』応帝王篇の説話を踏まえる。○千年様子〓〓宇宙の根源である「太極」はもともと認識を超越したもので

あるが、周惇頤は「太極図」を著して太極から万物が生成していく消息を説明し、彼以降の思想家に学説の根拠を与えたことを言う。○道州〓〓現在の湖南省永州市。周惇頤の出身地。○影響尚疑朱仲晦〓〓『王文成公全書』卷二十「月夜」二首 諸生と天泉橋に歌う（与諸生歌於天泉橋）」の第二首に「処処 中秋此の月 明なり、知らず何れの処にか亦た群英あるを、須らく憐れむべし絶学は千載を経たり、男児たるに負きて一生を過ごす莫かれ、影響尚お疑う朱仲晦、支離 鄭康成と作るを羞ず、鏗然として瑟を捨く春風の裏、点や狂なりと雖も我が情を得たり（処処中秋此月明、不知何処亦群英、須憐絶学経千載、莫負男児過一生、影響尚疑朱仲晦、支離羞作鄭康成、鏗然捨瑟春風裡、点也雖狂得我情）」とある。前引の「夜坐」と同様、正徳十六年（一五二一）に紹興に戻つて以降に作つた「居越詩三十四首」のうちの一つである。なお、原詩では「休」を「羞」に作る。第六句に鄭玄が出てくることから、第五句の内容は『大学章句』の「格物補伝」をはじめとする朱熹の経書解釈を批判したものである。（鶴成久章）

【九〇】

〔原文〕

陽明詩教但致良知成德業、乱草草事。只是良知更莫疑、撥草尋牛事。直造先天未画前、望見白牛事。咦、他的這條牛、犯人苗稼管取收拾不徹。

〔書き下し文〕

陽明の詩教の「但だ良知を致して徳業を成せ」とは、「乱草草の事なり。「只だ是れ良知のみ更に疑う莫かれ」とは草を撥きて牛を尋ねるの事なり。「直に先天未画の前に造る」とは白牛を望見するの事なり。咦、他の這條は、牛、人の苗稼を犯すに、管取收拾し徹れざるなり。

〔現代語訳〕

陽明の詩で「ただ良知を發揮して徳行を成就せよ」と言っているのは「心を」乱し苦めることである。「ただ良知だけであつて疑つてはならない」とは、「十牛図にある」本来の自己を外に探し求めることである。「直に先天未画以前の根源に至る」とは、「大乘の」根本義を遠く眺めていることである。ああ、「しかし」彼「陽明の」この条は、「あたかも」牛が他人の稲の苗を食べてしまっているのに、きつと懲らしめきれないのである。

〔注〕

○但致良知成徳業〓〓『王文成公全書』卷二〇「示諸生三首」の第一首に「爾の身 各各自ら天真 用いず人に求め更に人に問うを 但だ良知を致して徳業を成せ 謾りに故紙に従つて精神を費や

す 乾坤は是れ易 原と画に非ず 心性何の形ぞ 塵有るを得ん

道う莫かれ先生禅語を学ぶと 此の言端的 君の為に陳ぶ(爾
身各自天真、不用求人更問人。但致良知成德業、謾從故紙費精
神。乾坤是易原非画、心性何形得有塵。莫道先生学禅語、此言端
的為君陳)、『王陽明全集』第六卷、四八三頁)とある。○草
草 心を勞すること。(『大漢和』九卷六四六頁) ○只是良
知更莫疑 王成公全書』卷二〇「詠良知四首示諸生」に「個
個の人心仲尼有り 自ら聞見を將て遮迷に苦しむ 而今指与せよ
真頭面 只だ是れ良知更に疑う莫かれ(個個人心有仲尼。自將聞
見苦遮迷。而今指与真頭面。只是良知更莫疑)。(同前掲書、四
八二頁)とある。○尋牛 十牛図の第一。初発心の位のこと。
牛は本来の面目のたとえ。本来の面目を尋ねて参禅学道に志す位
のこと。(『禅学』六〇七頁)。「住鼎州梁山廓庵和尚十牛圖頌(并
序) (Z64-773c) に「牛を尋ぬ 序の一 從來失せず、何ぞ追尋を
用いん。背覺に由つて以て疎と成り、向塵に在つて遂に失す。家
山漸す遠く、岐路俄に差う。得失熾然として、是非烽起す。頌
に曰く 忙忙として草を撥い去いて追尋す 水濶く山遙かにして
路更に深し 力尽き神疲れて覓むるに処無し 但だ聞く楓樹に晚
蟬の吟ずるを(尋牛序一 從來不失。何用追尋。由背覺以成疎、
在向塵而遂失。家山漸遠、岐路俄差。得失熾然、是非鋒起。頌曰
忙忙撥草去追尋 水濶山遙路更深 力尽神疲無処覓 但聞楓樹
晚蟬吟)」とある。(梶谷宗忍『信心銘・証道歌・十牛図・坐禅
儀』禅の語録 16、一九七九年、筑摩書房、一〇七頁を参照。)

○直造先天未画前 王成公全書』卷二〇「別諸生」に「
離れず日用常行の内 直ちに造る先天未画の前 手を握り歧に臨
みて更に何を語らん 殷勤婉づる莫かれ別離の筵(不離日用常
行内、直造先天未画前。握手臨歧更何語、殷勤莫婉別離筵)。(同
前掲書、四八六頁)とある。「先天未画」は天に先立ち、伏羲が
八卦を画く前、存在の根源のこと。○白牛 白牛車のこと。
大乘の教え(『漢語』八冊一六七頁)。「六祖大師法寶壇經」機緣
第七(178・35c) 参照。○嘆 驚き怪しむ。え。感嘆詞。
○苗稼 稲の苗。○管取 管保、管教。きつと、必ず。(『漢
語』八冊一二〇一頁) ○收拾 懲らしめる。(『中国語』二
八一六頁) (荒木龍太郎)

【九一】 [原文]
悪動之念、答也。知其為答、則終日動而無惡。喜静之念、答也。
知其為答、則終日静而無喜。無惡則動亦定。故終日動而自不覺其
動也。無喜則静亦定。故終日静而自不覺其静也。是謂動而無動、
動可静矣。静而無静、静可動矣。一動一静、無非造化妙機、円融

不滞、其如是、天地亦如是也。上下与天地同流。豈曰小補之哉。

【書き下し文】

動を惡むの念は、答なり。其の答為るを知れば、則ち終日動きて
惡む無し。静を喜ぶの念は、答なり。其の答為るを知れば、則ち
終日静にして喜ぶ無し。惡む無ければ則ち動も亦た定まる。故に
終日動きて自ら其の動を覺らざるなり。喜ぶ無ければ則ち静も
亦た定まる。故に終日静にして自ら其の静なるを覺らざるなり。
是れを「動にして動無く、動にして静なるべし。静にして静無く、
静にして動なるべし」と謂う。一動一静、造化の妙機に非ざる無
し。円融にして滞らず、某も是くの如く、天地も亦た是くの如き
なり。上下、天地と流を同じうす。豈に「之を小補す」と曰わん
や。

【現代語訳】

動(くこと)を嫌がるのは、間違いだである。それが間違いで
あることが分かれば、一日中動いていても(そのことを)嫌がるこ
とはない。静(かであること)を喜ぶのは、間違いだである。それ
が間違いだであることが分かれば、一日中静(か)であつても喜ぶ
ことはない。嫌がるのがなければ、動(いていて)も(安)定
する。だから一日中動いていても自分でも動いていることに気付
かないのである。喜ぶことがなければ静(かであること)も(安)
定する。だから一日中静かでも自分でも静かであることに気
付かないのである。このことを「動であつても動ではなく、動で
あつても静である。静であつても静でなく、静であつても動である」
といふのである。動である時と静である時それぞれが、造化の絶
妙なる機会でないことはないものであり、事物が完全な状態で互
に妨げあうことがなく、「また」停滞することが無く、なんでも
そのようになるのであり、天地もまたそのようになるのである。
上下、天地の流行と同じなのである。「そうであれば」どうして
このことを「他の何かと」比較すると言えようか。

【注】

○動亦定 既出。○静亦定 既出。○動而無動、動可静
矣。静而無静、静可動矣。『通書』動静に、「動にして動無く、
静にして静無きも、不動不静に非ざるなり。【朱熹注】動中に静
有り。静中に動有り(動而無動、静而無静、非不動不静也。【朱
熹注】動中有静。静中有動)」とあるのを踏まえたものであるう。

○造化 天地自然の理。万物を創造化育すること。(『大漢
和』十一卷七二頁) ○円融 それぞれのものが、その立場を
保ちながら完全に一体となつて、互いに融け合いさまたげのない
こと。事物が完全に相即していること。(『中村』一一五頁)
○上下与天地同流。豈曰「小補之」哉。『孟子』尽心上に、「霸
者の民は、驩虞如たり。王者の民は、皞皞如たり。之を殺すも怨

みず、之を利するも庸とせず、民、日に善に遷るも之を為す者を知らず。夫れ君子の過ぐる所は化し、存する所は神にして、上下、天地と同流なり。豈に『之を小補す』と曰わんや（覇者之民、驩虞如也。王者之民、皞皞如也。殺之而不怨、利之而不庸、民日遷善而不知為之者。夫君子所過者化、所存者神、上下与天地同流、豈曰『小補之』哉）とある。（岩波文庫本上冊三三一頁）
（野口善敬・森宏之）

【九二】

【原文】

有問、学人那個是汝的妄心。人曰、汝問我的、是妄心。又問、除了妄心、那個是汝的。人不能答。問渠。渠曰、除了妄心、是汝的。又問、那個是汝的真心。人曰、我答汝的、是真心。問、除了真心、那個是汝的。人不能答。問渠。渠曰、除了真心、是汝的。

【書き下し文】

有るもの問う、「学人、那個か是れ汝の妄心なる」と。人曰く、「汝の我に問うもの、是れ汝の妄心なり」と。又問う、「妄心を除きれば、那個か是れ汝なるものぞ」と。人、答うる能わず。渠に問う。渠曰く、「妄心を除き了れる、是れ汝なるものなり」と。又問う、「那個か是れ汝の真心なる」と。人曰く、「我の汝に答うるもの、是れ真心なり」と。問う、「真心を除き了れば、那個か是れ汝なるものぞ」と。人、答うる能わず。渠に問う。渠曰く、「真心を除き了れる、是れ汝なるものなり」と。

【現代語訳】

ある者が質問した、「修行者よ、あなたの妄心とは、どういふものなのか」と。「質問された」人は「あなたが私に（「こういふことを」質問している、それこそが妄心なのだ」と答えた。再び「ある者が」質問した、「妄心を除きおわったとき、（そのときの）あなたとは、どういふものなのか」と。人は答えることができず、私に尋ねた。私は、「妄心を除きおわったものが、あなたなのだよ」と言った。再び「ある者が」質問した、「あなたの真心とは、どういふものなのか」と。人は「私があなたに（「こうして」）答えている、それこそが真心なのだ」と答えた。「ある者は」「真心を除きおわったとき、（そのときの）あなたとは、どういふものなのか」と質問した。人は答えることができなかつた。「そこで」私に尋ねた。私は、「真心を除きおわったものが、あなたなのだよ」と言った。

【注】

○学人〓仏道を参学修行する人。「学者」とも。○妄心〓迷いの心。誤った分別心。（『中村』一三三頁）○真心〓純淨の眞実心。偽りのない心。純一無雜な清らかな心のこと。直心。（『中

村』七八四頁）

（楢崎洋一郎）

【九三】

【原文】

古之学者、登了彼岸、才渡此岸人。今之学者、尚在此岸、船也不會尋見、便要渡人過河、皆是狂心未歇。故曰人之患在好為人師。古之学者、未登彼岸也、如駕一葉之舟、過東洋大海、洪濤巨浪中、望見彼岸不得到、危疑生死之際、有甚閒心腸去尋起人來度脱。

【書き下し文】

古の学者は、彼岸に登了し才かに此岸の人を渡す。今の学者は、尚お此岸に在りて、船も也た會つて尋ね見ずして、便ち人を渡し河を過ぎらんと要す。皆是れ狂心未だ歇きず。故に曰く「人の患いは人の師たるを好むに在り」と。古の学者、未だ彼岸に登らざれば、一葉の舟に駕して東洋の大海を過ぎんとするが如し、洪濤巨浪の中、彼岸を望見して到るを得ず。危疑生死の際、甚の閒心腸ありて、人を去き尋ね起こし度脱せしめん。

【現代語訳】

古の学者は、「生死の河を越えた」彼岸に行きついて始めて、「迷いの」此岸にいる人を渡そうとする。今の学者、まだ「迷いの」此岸にいるのに、「乗って渉る」舟さえも探したこともないのに、もう人に河の向こう岸に渡らせようと思つている。「このような」錯覚心は人みな停まりようがない。だから「孟子に」「人の悪い癖は、とかく他人の先生となりたがることだ」というのだ。古の学者にあつては「生死の河を越えた」彼岸に行き着いていないならば、一艘の小舟に乗つて、東の大海原を渡ろうとするようなものだ。宏大な波濤と巨大な浪の中で彼岸の世界を遠く垣間見つても行き着くことが出来ず、危疑生死の際に、どのような心根で人をさがしてまで濟度させることがあるうか。

【注】

○人之患在好為人師〓『孟子』離婁篇上に「人之患、在好為人師」（岩波文庫本下冊五二頁）とある。○狂心未歇〓『人天眼目』卷五（148・326b）に「狂心不歇。歇則菩提。垢淨心明。本來是仏」とあり、仏典（の注釈）に「所謂狂心不歇。歇即菩提」とよく引用される。○危疑生死〓生死危疑。命がけの危機。『永覚元賢禪師広録』（巻十四）「逆浪顛風の会、生死危疑の間に当り、毫も主宰なく、遂に自刎するに至る。哀しき哉。（當逆浪顛風の會。生死危疑之間。毫無主宰。遂至自刎。哀哉）」（題卓悟焚書後）。○度脱〓生死の苦海を渡り、さどりの彼岸にいたること。（藤井良雄）

【九四】

〔原文〕

太上忘言之道、神不得而与、化不得而入、况精气乎。精气不得而与、况形之相禅乎。是故不能忘形、非大化之道。不能精气・神、非超生之訣。謂其有也、不有則無。皆非太上忘言之道。

〔書き下し文〕

太上の忘言の道は、神も得て与らず、化も得て入らず、況んや精气をや。精气も得て与らず、況んや形の相い禅るをや。是の故に形を忘れること能わざれば、大化の道に非ず。精气・神を忘れること能わざれば、超生の訣に非ず。其の有を謂うや、有ならざれば則ち無なり。皆太上の忘言の道に非ず

〔現代語訳〕

最高の言語を超えた道は、天地神妙の作用も関与できないし、天地自然の変化も介入できない。まして精气はなおさらである。精气も関与できない。まして変化する形体はなおさらである。だから形体を忘れることができなければ、「根源的な」大化の道ではない。精气や天地神妙の作用を忘れることができなければ、「日常の」生を離脱する秘訣ではない。何かがあるというならば、有るのでなければ、存在しないことになってしまふ。「有と無にとられることは」いづれも最高の言語を超えた道ではない。

〔注〕

○太上忘言 太上は『老子』一七章に、「太上は下これ有るを知る。其の次は親しみてこれを誉む。其の次はこれを畏る。其の次はこれを侮る(大上下知有之。其次親而誉之。其次畏之。其次侮之)」とある。(講談社学術文庫本、六五頁) 忘言は『莊子』寓言篇に、「言は意を在る所以なり。意を得て言を忘る(言者所以在意。得意而忘言)」とある。(岩波文庫本四冊三四頁) ○神不得而与、化不得而入 『易経』繫辞下伝・第五章に、「神を窮め化を知るは、徳の盛なるなり。(窮神知化、徳之盛也)」とある(岩波文庫本下冊二六一頁)。一〇三条にも、「安くんぞ孔子聰明叡知の、神を窮め化を知る能わずして、仙仏の玄関を透らざること有らんや。(安有孔子聰明叡知、不能窮神知化、弗透仙仏玄関者也)」とある。○精气 『易経』繫辞上伝・第四章に、「精气は物を為し、遊魂は変を為す(精氣為物、遊魂為變)」とあり、本田濟氏は「陰の精と陽の氣とが結合するとき、形ある物となり、分散して魂が浮遊するとき、或いは幽霊のごとき変異をなすこともある(『周易正義』)」と訳している。(新訂中国古典選第一巻『易』昭和41年、朝日新聞社、四八六―四八七頁) ○不能忘形 『易』昭と41年、朝日新聞社、四八六―四八七頁) ○安くんぞ能く神に入らん。未だ神を忘れること能わざれば、安くんぞ能く生を超えん。(蓋未能忘形、安能入神。未能忘神、安能超生)」とある。『莊子』に、「故に志を養う者は形を忘れ、

形を養う者は利を忘れ、道を致す者は心を忘る(故養志者忘形、養形者忘利、致道者忘心矣)」(岩波文庫本四冊七五頁)とある。

○大化 『列子』天瑞篇に、「人は生より終に至るまで、大化に四有り(人自生至終、大化有四)」とあり、四つの大変化(嬰孩・少壮・老耄・死亡)とされるが、ここではあらゆる変化の根源となる道の意に解した。六二条に、「一切抛下すれば、身心安静なり。安静なれば、則ち氣清し。氣清ければ、則ち精神翕る。翕れば、則ち靈なり。靈なれば、則ち徹す。徹すれば、則ち本元に透りて、大化の功成るべし(一切抛下、身心安静。安静則氣清。氣清則精神翕。翕則靈。靈則徹。徹則可以透本元而大化功成矣)」とある。○非超生之訣 『超生』とは、『漢語』(第九冊一一二頁)に、「物質・生命の界限を超越し、物外に超然たるを謂う(謂超越物質・生命の界限、超然物外)」とあり、『関尹子』(四符)の「能く精神を見て久生し、能く精神を忘れて超生す(能見精神而久生、能忘精神而超生)」を引用している。○謂其有也、不有則無 『後秦の僧肇の「肇論」に、「有ること無きが故に、則ち無も無し(有無有故、則無無)」(T45・156a)とある。宋の永明延寿の『万善同帰集』巻下に、「有既に有ならざれば、則ち無も無きなり(有既不有、則無無也)」(T48・983c)とある。(牛尾弘孝)

〔九五〕

〔原文〕

虚則入道之門、致静之要也。致虚存虚、猶未離有。守静存静、猶陷於動。致虚不極、有未忘也。守静不篤、動未忘也。事情擾擾、安能致虚。不虛、安能致静。不静、安能清淨。

〔書き下し文〕

虚は則ち道に入るの門、静を致すの要なり。虚を致して虚を存するは、猶未だ有を離れざるなり。静を守りて静を存するは、猶お動に陥るなり。虚を致すこと極まらざるは、有未だ忘れざるなり。静を守ること篤からざるは、動をば未だ忘れざればなり。事情擾擾たらば、安くんぞ能く虚を致さん。虚ならずんば、安くんぞ能く静を致さん。静ならずんば、安くんぞ能く清淨ならん。

〔現代語訳〕

「虚」とはつまり道に入る門であり、静を致すことの「枢」要である。「虚」をきわめ「ようとし」て「虚を残し」たりしているうちは、まだ「有」から、離れていないのである。「静を守つ(ろうとし)て、「静を残し」たりしているうちは、まだ「動」に陥っているのである。「虚を極めつくせない」のは、「有」を忘れていないからである。「静」をきちんと守れないのは、「動」を忘れていないからである。「身の回りの」事柄がごたごたして

いれば、どうして「虚を極める」ことができようか。「虚」でなければ、どうして「静を極めること」ができようか。「静」でなければ、どうして「清浄」でありえようか。「いやあり得ないの」である。」

【注】

○致静・致虚Ⅱ「南詢録自叙」に「故に曰く、無上甚深微妙法、百千万劫にも遭遇し難し、と。此の竅に透らんと欲せば、須く、虚を致し静を守るべし。虚を致して極めざるは、有未だ忘れざるなり。静を守りて篤からざるは、動未だ忘れざるなり。虚極まり静篤ければ、清浄に入るを得。清浄本然は、道の消息なり。渠、此に從事し、遂に悟入することを得たり。(故曰、無上甚深微妙法、百千万劫難遭遇。欲透此竅、須致虚守静。致虚不極、有未忘也。守静不篤、動未忘也。虚極静篤、得入清浄。清浄本然、道之消息。渠從事於此、遂得悟入)」とある。「無上甚深微妙法」(開經偈前半二句を踏まえる)や「致虚不極、有未忘也。守静不篤」(「老子第一六章を踏まえる」などについては自叙注を参照。また、「致虚存虚」としては『老子翼』巻一(焦竑撰)に「蘇注に、虚を致すこと極まらざれば則ち有未だ亡びざるなり、静を守りて篤からざれば則ち動未だ亡びざるなり」とあり。丘山、去ると雖も而れども微塵は未だ尽きず、未だ極と篤とを為さざるなり。蓋し虚を致し虚を存すること、猶未だ有を離れず、静を守り静を存すること、猶お動に陥る。而るを況や其の他をや。極めず篤からずして虚静の用を責むるは難し。已に虚極まり静篤ければ、以て万物の変を觀、然る後、變の乱る所と為らず。(蘇注、致虚不極則有未亡也、守静不篤則動未亡也、丘山雖去而微塵未盡、未為極與篤也。蓋致虚存虚、猶未離有、守静存静、猶陷于動。而況其他乎。不極不篤而責虚静之用難、已虚極静篤、以觀万物之變、然後不為變之所乱)」とある。○事情Ⅱ四〇条を参照(「事情」と訳す。「事情好与不好」を「事情が善いか悪いかといったこと(世俗の価値観)」としている)。また、この他に「このありさま。ことのおもむき。用事、仕事」の意もある(『大漢和』一卷四一三頁)。ここでは「世間、身の回りの事情」と訳した。○擾擾Ⅱ八九条参照。こたごたとすることの形容(『中国語』2534)。「紛乱の様、煩乱の様」(『漢語』六冊九五六頁)。(安部力)

【九六】

【原文】

上僊之学、謂精神凝定、縦能与天地同其悠久、終須敗壞。故捨之而不煉養。昧者謂其荒唐、無有下落。不知精神之外、有個大覺海、汪洋澄澈、無有辺表。反視神明功化、如遊月宮而觀螢光也。清浄

一竅、乃大覺海消息、忘得神機、即透此竅。脱胎換骨、實在於此。【書き下し文】

上僊の学は、精神凝定し、縦い能く天地と其の悠久を同じくするも、終に須らく敗壞すべしと謂う。故に之を捨てて煉養せず。昧きは謂えらく、其れ荒唐にして、下落有る無しと。精神の外に、個の大覺海有り、汪洋澄澈して、辺表有る無きを知らざるなり。神明の功化を反視するは、月宮に遊んで螢光を觀るが如きなり。清浄の一竅は、乃ち大覺海の消息なり。神機を忘れ得ば、即ち此の竅に透る。脱胎換骨は、實に此に在り。

【現代語訳】

上仙の学では、精神が集中し安定して、たとえ天地と同じように悠久でいられるようであっても、結局は滅びてしまふとされる。だから、「上仙の学では」精神の安定を捨てて修養につとめないのである。暗愚な者は、それだと自墮落で、落ち着くところがなくなるかと考える。「そういう連中は」精神のほかに、広大な悟りの大海があつて、「それは」広々として澄み渡つていて、はてるところが無いのを知らないのである。「大覺海の中で、自己の」精神の功化をふりかえつて見るのは、月の宮殿に遊んで螢の光を觀察するようなものである。清浄という一竅こそが、大いなる悟りの秘訣である。精神のはたらきを忘却することができれば、直ちにこの竅を悟ることが出来る。凡俗の境地を捨て去り聖仙の境地に生まれ変われるかどうかは、實にこの点にかかつている。

【注】

○上僊Ⅱ道家の説く「九仙」のうちで最高の境地。『雲笈七籤』卷三「道教三洞宗元」に、「太清の境に九仙有り。……其の九仙とは、第一は上仙、二は高仙、三は大仙、四は玄仙、五は天仙、六は真仙、七は神仙、八は靈仙、九は至仙なり。(太清境有九仙。……其九仙者、第一上仙、二高仙、三大仙、四玄仙、五天仙、六真仙、七神仙、八靈仙、九至仙。)」とある。○精神Ⅱ『道教大辞典』(華夏出版社、一九九四年、九八四頁)には、「精神者、生命之根。」と言ひ、『文昌大洞仙経』「精者、神之本、氣者、神之用、形者、神之宅。(中略※筆者)故精神者、一身命脈之所関。」を引く。五〇、六二、一〇四、一〇八、一一〇条を参照。

○凝定Ⅱ精神を集中・安定させること。『雲笈七籤』卷八十一に、「玄靈飛去し、心神凝定すれば、則ち五方の秀氣、靈台に入る。(玄靈飛去、心神凝定、則五方秀氣入於靈台。)」とある。○与天地同其悠久Ⅱ一七条に既出。○煉養Ⅱ道教の修養を言う基本用語。道を修め、氣を煉つたり丹を煉ることで身体・性命を保養すること。「煉」は「鍊」に作ることも多い。○荒唐Ⅱ『莊子』天下篇に「莊周其の風を聞きて之を悦び、謬悠の説、荒唐の言、端崖無きの辞を以つて、時に恣縦して儻せず、臍

を以て之を見ざるなり。(莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、不以觴見之也。)(岩波文庫第四冊二二八頁)とあるように、元來は荒唐無稽の意であるが、ここでは放縱、自墮落という意味で解釈した。○下落は落ち着くところ。(『禪語』四〇頁) ○大覺海は「大覺」は大いなる悟りの境地。「覺海」は悟りの広大さを海に譬えたもの。○辺表は「辺際、きわ」。『信心銘』に「極小は大に同じく、境界を忘絶す。極大は小に同じく、辺表を見ず。(極小同大、忘絶境界。極大同小、不見辺表。)」とある (T48・376b)。○神明は精神の意と考えた。『荀子』解蔽篇に「心なる者は、形の君なり。而して神明の主なり。(心者、形之君也。而神明之主也。)」とある。(岩波文庫下冊一四七頁) ○月宮は月の都にあつたとされる伝説上の宮殿。嫦娥が住んでいたとされる。○清浄は煩惱を脱した境地。自序、七一、九五条を参照。○一竅は四〇、四七、六七、八六、八九、一一二条を参照。○消息は『中国語』(三三九四頁)により、秘訣と解釈した。○神機は『一六、四〇、五七、七一』を参照。○脱胎換骨は凡胎を脱して聖胎になり、凡骨を換えて仙骨になること。このあと、九八、一〇九条にも見られる。(鶴成久章)

【一九七】

【原文】

官安吾曰、衆人之欲、自堯舜為之皆天理之流行。堯舜之天理、自衆人為之皆人欲之横肆。渠曰舜在三界外安身、三界遊戯、飲食男女皆妙有也。衆人在三界安身、不知有三界外玄旨、飲食男女皆縦情也。学者見解在天地万物外、運用在天地万物、未超数量有而難化。渠寄身在天地万物、作用在天地万物外、超於数量大能化。

【書き下し文】

官安吾曰く「衆人の欲は堯舜より之を為せば皆天理の流行なり。堯舜の天理は、衆人より之を為せば皆人欲の横肆なり」と。渠曰く「堯舜は三界外に在りて身を安んじ、三界の遊戯すれば、飲食男女皆妙有なり。衆人は三界の在りて身を安んじ、三界の外の玄旨有るを知らざれば、飲食男女皆縦情なり。学者の見解は天地万物の外に在れども、運用は天地万物の在れば。未だ数量を超えず、有にして化し難し。渠は寄身は天地万物の在れども、作用は天地万物の外に在れば数量を超えて、大にして能く化す」と。

【現代語訳】

官安吾が言った「庶民の欲も、堯舜の見地でするなら全て天理(の現れ)であり、堯舜の天理も庶民の見地でするなら全て勝手気ま

まな人欲の横溢である」と。私は言った「堯舜はこの世界の外で身を安らかに守り、この世界で心のままに無碍自在であるので、大欲も妙有(「真実のもの」となる。庶民はこの世界に身を落ち着け、この世の外の奥深い意味があるのを知らないので大欲はほしいままの情欲となる。学ぶ者の見識は現実世界の外に越えているが、実践は現実世界の内に「執着して」いるので、まだ思慮按排を超出しておらず、有(限)であって教化しにくい。「それとは反対に」私は、身を任せるのは現実世界の内であるが、行動(意味)は現実世界の外に越えて「自在で」いるので思慮按排を超出して教化できるのだ」と。

【注】

○官安吾は『一〇九条参照。『河南通志』卷六〇(『四庫全書』)に「蔡毅中字宏甫光山人与同邑官安吾同事天台耿先中講明正心誠意之訖」とある。蔡毅中、字は宏甫、号は濮陽。光山県の人(一五四八〜一六三一)。万曆二九進士。『明人』(八一三頁)。○三界は「この世。世界。二四條参照。○飲食男女は『礼記』礼運篇に「飲食男女は、人の大欲なり。(飲食男女、人之大欲焉)」とある。大欲は食欲・性欲のこと。○数量は考慮する。(『中国語』二八五頁) ○寄身は身をまかせ。(『大漢和』三卷一〇四七頁) ○妙有は「真実の有。真空の上にあられてくる有。(『禅学』一一八六頁・『中村』一三〇一頁) ○大化は『孟子』尽心章句下に「大にして之を化す、之を聖と謂う(大而化之之謂)」(岩波文庫本下冊四一四頁)とある。(荒木龍太郎)

【一九八】

【原文】

俗種凡胎、根深蒂固、苟不脱胎換骨、是以世情懷抱、貪求出世玄旨。豈不難哉。

【書き下し文】

俗種凡胎、根深く蒂固く、苟も脱胎換骨せざれば、是れ世情の懷抱を以て、出世の玄旨を貪求す。豈に難からずや。

【現代語訳】

「悟りを開けず六道を輪廻している」凡俗な存在は、「その原因となる迷いの」根が深く堅固であるため、徹底して改めなければ、俗世で培った分別意識を抱いたまま出世の玄旨を貪り求めてしまう。「真理を悟ろうとしても」どうして困難でないことがあるうか。

【注】

○俗種凡胎は「迷いの世界を輪廻転生している凡俗な存在。そのままの典拠は見当たらないが、『宏智禪師広録』卷八「礼五祖大満禪師塔」の第二句に「種、凡胎に異なり(種異凡胎)」(T48-100a)

とあり、時代は下るが、清代の『金剛經註釈』の「非衆生非不衆生」条に、「卵・胎・湿・化の諸種、或いは變化して其の凡胎を脱する者有り。一たび其の凡を脱すれば、便ち是れ「悟りの」岸に登る（卵胎湿化諸種、或有變化而脱其凡胎者。一脱其凡、便是登岸）」(Z4030c)とある。○根深蒂固Ⅱ『老子』五十九章に「国を有つる母、以て長久なるべし。是れを深根固蒂、長生久視の道と謂う（有国之母、可以長久。是謂深根固蒂、長生久視之道）」(中国古典選Ⅱ『老子』朝日文庫、一一七頁)とあり、『韓非子』解老篇に「抵固ければ則ち生長し、根深ければ則ち視久す（抵固則生長、根深則視久）」とあるのを踏まえた表現。ここでは、原因が根深く改め難いという意。○脱胎換骨Ⅱ一般に「換骨奪胎」「奪胎換骨」という熟語として用いられることが多い。『中国語』「奪胎換骨」条(八一二頁)には「もと道教で、他人の胎児を奪って転生し、凡骨（凡人の骨）を取り換えて仙人になること。つまり、根本から聖者仙人として生まれ変わることという。」「奪」と「脱」とは普通であり、道教では「奪胎」ではなく「脱胎（生まれ変わる）」という形でしばしば用いられている。（野口善敬・森宏之）

【九九】

「原文」

事就是理、有個理就是煩惱。一切是妄、有個妄就是煩惱。向上之学、也不管他是理、也不管他是妄、只恁等薰直做去。就是無心道人。行所無事、其智亦大矣。

「書き下し文」

事は就ち是れ理なりとするも、個の理有るは就ち是れ煩惱なり。一切は是れ妄なりとするも、個の妄有るは就ち是れ煩惱なり。向上の学は、也た他の是れ理なるに管せず、也た他の是れ妄なるに管せず、只だ恁等薰直に做し去くのみ。就ち是れ無心の道人なり。事無き所に行れば、其の智も亦た大なり。

「現代語訳」

「具体的な」「事」が、そのまま「普遍的な」「理」である（「という」が、この「理」なるものが「実体として」有る（「と考える」）ことが、まさに煩惱に他ならない。「また」一切は妄である（「ともいう」が、この「妄」なるものが「実体として」有る（「と考える」）ことが、まさに煩惱にほかならない。一段上に突き抜けた学は、「理」であろうと、「妄」であろうと、そんなことには関わろうとせず、ただ、このように、ひたすら実践していくだけである。これでこそ「ことさらな作為を超えた」無心の道人であると言えよう。「作為的に設けられた」「事」というものがないところではたらかされるならば、「人に本来備わっている」智のはた

らきも、偉大なものとなるのである。

「注」

○一切是妄Ⅱ『景德伝燈録』卷五「司空山本淨禪師」に、「又、安禪師なる者有り。問うて曰く、『道は既に仮名にして、仏も妄りに立つと云い、十二分教も亦た是れ接物度生なりと。一切是れ妄ならば、何を以てか真と為さん』と。師曰く、『妄有るが為の故に、真を將て妄に対す。妄性本空なることを推窮せば、真も亦た何ぞ曾て有らんや。故に知んぬ、真妄総て是れ仮名にして、二事は対治にして都て実体無く、其の根本を窮むれば、一切皆空なることを』と。曰く、『既に一切是れ妄と言わば、妄も亦た同じく真にして、真妄殊なること無し。復た是れ何物ぞ』と。師曰く、『若し何物と言わば、何物も亦た妄なり。經に云う、『無相は比況無きに似て、言語の道断ゆること、鳥の空を飛ぶが如し』と。安公慚伏して措く所を知らず（又有安禪師者。問曰、道既仮名、仏云妄立、十二分教、亦是接物度生。一切是妄、以何為真。師曰、為有妄、故將真对妄。推窮妄性本空、真亦何曾有故。故知、真妄総是仮名、二事対治都無実体。窮其根本、一切皆空。曰、既言一切是妄、妄亦同真、真妄無殊。復は何物。師曰、若言何物、何物亦妄。經云、無相似無比況、言語道断、如鳥飛空。安公慚伏不知所措）」(T51-243b)とある。○向上之学Ⅱ一段上の学。

○恁等Ⅱこのように、の意。○薰直Ⅱ直ちに。まっしぐらに。『禅学』一一七二頁) ○無心道人Ⅱ『伝心法要』に、「十方の諸仏を供養するは、一箇の無心の道人を供養するに如かず。何が故ぞ。無心とは、一切の心無きなり（供養十方諸仏、不如供養一個無心道人。何故。無心者、無一切心也）」云々とある（入谷義高『禅の語録』8 伝心法要・宛陵録』筑摩書房、一九六九、一二頁)。 ○行所無事其智亦大矣Ⅱ『孟子』離婁下篇に、「智に悪む所は、其の鑿つが為なり。如し智者も禹の水を行るが若くなれば、則ち智に悪むこと無し。禹の水を行るや、其の事無き所に行るなり。如し智者も亦た其の事無き所に行れば、則ち智も亦た大なり（所悪於智者、為其鑿也。如智者若禹之行水也、則無惡於智矣。禹之行水也、行其所無事也。如智者亦行其所無事、則智亦大矣）」とある。（岩波文庫本下冊九四頁）（檜崎洋一郎）

【一〇〇】

「原文」

季文子三思、思之不多、孔子嫌其多。周公之仰思、思之多、孟子不嫌其多。蓋以学是不当思思之、其事惑、是其思也非学。周公是当思思之、其理明、是其思也是学。南詢録所記渠言如此。渠亦如此、学亦如此也。自透関人視之、謂渠言在世界外安身、世界内遊戯、一切皆妙有也。未透関人視之、謂渠言在世界外、行在世界内、一

切皆縦情也。其所以顛三倒四。世情中頗有操守者、尚不如此。安能免人之無議也。嗚呼、以幻修幻、就鬼打鬼、猶未離有。而況其著意如此者哉。

「書き下し文」

季文子の「三思」は、之を思うこと多からざるも、孔子は其の多きを嫌う。周公の「仰思」は、之を思うこと多かれども、孟子は其の多きを嫌わず。蓋し以えらく、学は是れ当に思うべからずして之を思えば、其の事惑う。是れ其の思うや学に非ず。周公は是れ当に思うべくして之を思えば、其の理明かなり。是れ其の思うや是れ学なり。『南詢録』に記す所の渠の言は此くの如し。渠も亦た此くの如し。学も亦た此くの如きなり。透関の人自り之を視れば、謂うに、渠は世界の外に身を安んじ、世界の内に遊戯して、一切皆な妙有なり。未だ透関せざる人より之を視れば、謂うに、渠は、言は世界の外に在り、行は世界の内に在りて、一切皆な情を縦にするなり。其れ顛三倒四する所以なり。世情中にて頗る無きを免れんや。嗚呼、「幻を以て幻を修め」「鬼に就きて鬼を打つ」、猶未だ有を離れず。而るを況んや其の意に著すること此くの如き者をや。

「現代語訳」

「『論語』公治長篇にみられる」季文子の「三思」は、思うことが多かったわけではないが、孔子はその多さを厭うた。「『孟子』離婁下にみられる」周公の「仰思」は、思うことが多かったけれども、孟子はその多さを厭わなかった。思うに、学とは、思うべきでないのに思えば、事に対処するにおいて迷いが生まれる。このように「思うべきでないのに」思うことは「真の」学ではない。周公はまさに思うべくして思い、その理は明らかになった。このように思うことが「真の」学である。『南詢録』に記された私の言葉が「まさに」そうであり、私自身もまたそうであり、「私の」学もまたそうである。悟った人から見れば、私は世界の外に身を横たえていながら、世界の中で遊び戯れているかのようで、全てが「相対を超えた」真理真実そのものである。まだ悟っていない人から見れば、私の言葉は世界の外にあって、行動は世界の中にあるようであり、全てが欲望のおもむくままにしているかのようである。そのように見えるのは「つまり、物の見方が」上下逆転してしまっているからである。俗世間の中で多少それなりにやっているような人でも、依然として「真の」学をしていない。どうして人々の誹りを受けないことなどありえようか。ああ、「幻の中にあって幻を修め」「鬼につきしたがって鬼を打ち」、依然としてまだ迷いの世界から離れられないのである。ましてや、このように心に囚われのある者はなおさらのことである。

「注」

○季文子三思『論語』公治長篇に「季文子、三たび思うて而る後に行う。子、之を聞いて曰く、再びせば斯ち可なりと。(季文子三思而後行。子聞之曰、再斯可矣)」とあるのを踏まえる。

○周公之仰思『孟子』離婁下篇に、「禹は旨酒を悪みて、善言を好む。湯は中を執りて、賢を立つるに方無し。文王は民を視ること傷めるが如く、道を望むこと未だ之を見ざるがごとし。武王は運きを泄らず、遠きを忘れず。周公は三王を兼ねて、以て四事を施なわんと思ふ。其の合せざる者有れば、坐して以て且を待つ(禹夜以て日を継ぎ、幸いにして之を得れば、坐して以て且を待つ)悪旨酒、而好善言。湯執中、立賢無方。文王視民如傷、望道而未之見。武王不泄邇、不忘遠。周公思兼三王、以施四事。其有不合者、仰而思之、夜以繼日。幸而得之、坐以待旦」とあるのを踏まえる(岩波文庫『孟子』下冊八二頁)。○透関『関門を通過し解脱の境地に達すること。悟りに達すること。(『禅学』九一二頁) ○妙有『真空妙有。相対を絶し一切の迷情の相を離れ、思慮を絶した不可得の般若の体。(『禅学』六〇八頁)

○顛三倒四『話』をしたり、事を処理するにおいて、支離滅裂で間違いが多いこと。意識がぼんやりとしていること。(『漢語』一二冊三四三頁)なお「顛倒」について、荒木見悟氏は『楞嚴経』の注釈において「正しいものをおやまれるものとし、あやまれるものを正しいとするように、物の見方が全く逆になっていること」(荒木見悟『楞嚴経』五四頁)と解説をされている。本文における「顛三倒四」はこちらの意味の方が近いだろう。○以幻修幻『円覚経』に「譬えば火を鑽るが如く、両木相因り、火出でて木尽き、灰飛んで煙滅す。幻を以て幻を修するも、亦復た是くの如し。諸幻は尽くと雖も、断滅に入らず(譬如鑽火、両木相因、火出木尽、灰飛煙滅。以幻修幻、亦復如是。諸幻雖盡、不入断滅)」(『T7. 914a』)柳田聖山『円覚経』中国撰述経典一、筑摩書房、三九頁)とある。○就鬼打鬼『出典未詳。七〇条に、「只だ妄心の内に於いて、此の妄心を了するに当つれば、是れを『鬼に就いて鬼を打つ』と謂う」とあるのを参照。○著意『作為を働かせ、または既成の觀念に囚われて、心本来の自然なる働きが妨げられていること。『伝習録』上巻に、「然れども心の本体は、原と無一物なるを知らずして、一向に意を著け、去きて善を好み悪を悪まば、便ち又た這の分の意思を多くし了る。便ち是れ廓然大公ならず。書の所謂『好を作し悪を作すこと有る無し』とは、方に是れ本體なり(：然不知心之本體原無一物、一向著意去好善惡、便又多這分意思、便不是廓然大公。書所謂無有作好作惡、方是本體)」とある。

(二〇一三年一月一日受理) (伊香賀隆)